

聖家族のエジプト逃避行——形ある伝説

三代川寛子

マタイによる福音書は、聖家族のエジプト逃避行について以下のように伝えている。東方の三博士が帰ったあと、養父ヨセフは天使のお告げを受け、ヘロデ王による幼児虐殺を逃れるため聖母マリアと幼子イエスを連れてエジプトに避難することになった。「エジプトに逃げ、わたしが告げるまで、そこにどまつていなさい。」(マタイ第二章第十三節) ヨセフはただちに幼子とその母を連れてエジプトへ去り、ヘロデが死ぬまでそこにいたという。しかしその記述は非常に簡潔であり、エジプトにどれくらいの間滞在していたのか、どのような経路でエジプトに行ったのかなど、詳細はまったく不明である。

しかしながら Meinardus (1963: 5) によると、聖家族のエジプト逃避行に関する伝承は、偽マタイ福音書、トマス福音書、イエスの幼児物語(以上いずれも外典)、第二十三代アレクサンドリア総主教(三八四―四二二年)による『テオフィルスの幻視』、ナイル・デルタに位置するサハー教区の司教ザカリヤによる説教(七世紀)、コプトおよびエチオピアの聖人暦、十三世紀のコプトの歴史書、ムスリムの間に伝わる伝承、そしてヨーロッパからの聖地巡礼者が書き残した中世の記録などに見いだされるという。

伝承により言及されている場所に多少の差異があるもの

の、エジプトには聖家族が立ち寄ったとされる場所がおおよそ二十五から三十カ所あり、たどった経路は概ね地図の通りとされている。また、サロメという名の産婆が同行したとも伝えられており、聖家族の逃避行を描いたアイコンにしばしば共に描かれる。聖家族一行がエジプトに滞在したと考えられている期間は伝承によつて一年から四年まで幅があるが、現在コプト正教会では三年半とするのが一般的なようである。

聖家族の逃避行は、ヨーロッパの宗教画の題材として好まれてきたことに示されるように、エジプトだけに伝わる伝承ではなく、広くキリスト教世界で共有されているものである。しかし、エジプトのキリスト教徒にとつて特別な意味を持つ伝承であることは間違いないだろう。地元キリスト教徒向けに刊行された聖家族の足跡の案内書には、しばしば「祝福されよ、わが民エジプト」(イザヤ第十九章第二十五節)、「わたしは、エジプトからわたしの子を呼び出した」(マタイ第二章第十五節、元はホセア第十一章第一節)などの聖書の言葉が添えられており、聖家族の訪問によりエジプトが神の祝福を受けた土地になったと考えられていることがうかがわれる(写真1参照)。なお、コプト正教会には、聖家族のエジプト到来を記念する独自の祝日がある(表参照)。

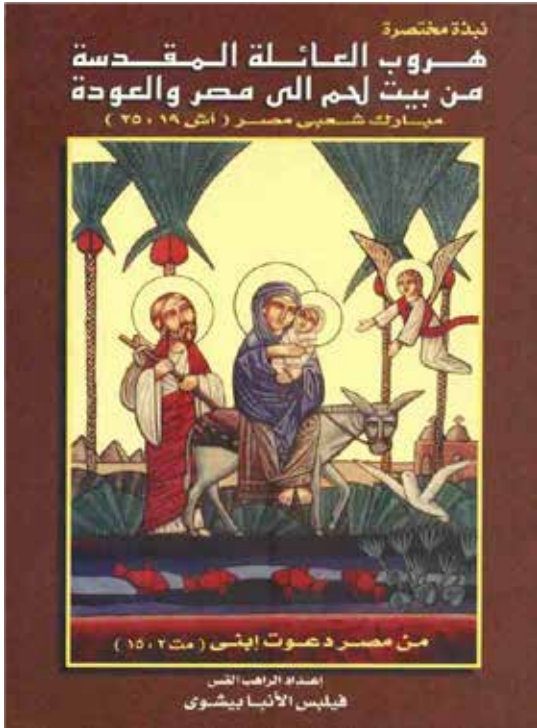
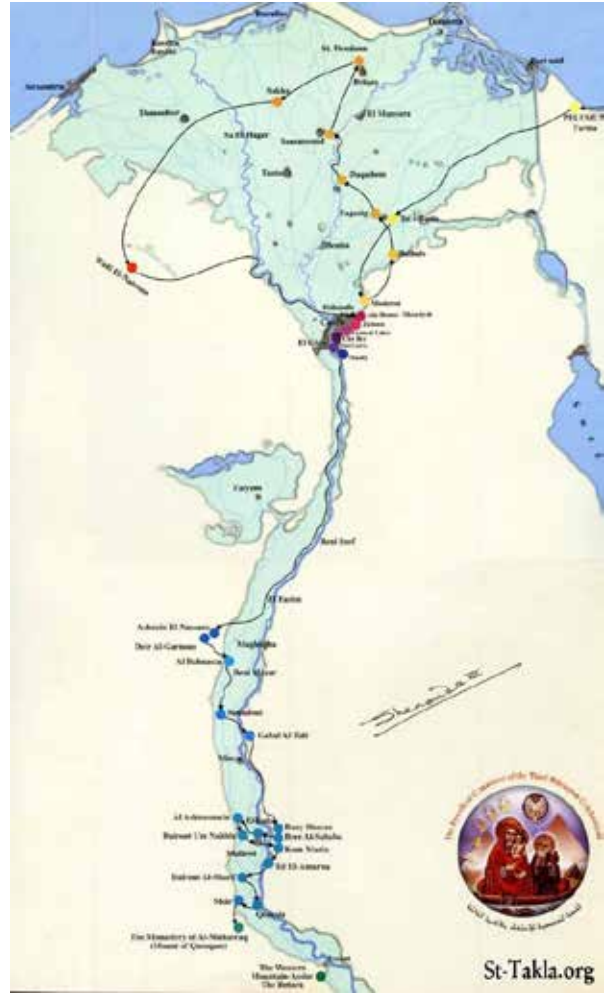


写真1：(Filib 1999) の表紙



地図：聖家族のエジプト逃避行の経路
Mawqi' al-Anbā Takla Hīmānūt "Holy Bible Maps"
より。



写真2：マリアの木（マタリーヤ地区、カイロ）
出所：2014年8月26日、筆者撮影

聖家族が訪れたとされる場所には、それを記念した教会や修道院などが建てられていることが多く、聖家族にちなんだ井戸や洞窟はコプト正教徒の巡礼地となっていたりする。例えばカイロ市北部のマタリーヤには、聖家族がその下で休んだとされる「マリアの木」が現存する（写真2参照）。この現存するマリアの木は十七世紀に植えられたエジプトイチジクの木であるが、偽マタイ福音書によると、そこに植わっていたのはなつめやしの木で、マリアがその実を食べたいとヨセフに告げたところ、幼子イエスの命により木が自ら折れ曲がり、マリアがほしいだけ実を取ると、ヤシの木はまた元通りになったという。別の伝説では、聖家族が盗賊に狙われた時、このエジプトイチジクの木が開き、その中に聖家族が身を隠して難を逃れたとされている。十四〜十五世紀頃のヨーロッパではこれらのマリアの木の伝説がよく知られていたようで、聖地エルサレムの後にエジプトに立ち寄った巡礼者らがマリアの木に関する複数の記録を残している（Meinardus 1963: 33-35）。

ほかには、同じくカイロの旧市街、ハーラトウ・ズウエイラ地区にある聖処女教会（四世紀）、オールド・カイロ地区のアブー・セルガ教会（四―五世紀）、カイロ南部のマアーディー地区のナイル川沿いにある聖処女教会（十一世紀）などはすべて聖家族が立ち寄ったとされる場所に建てられている。聖家族はマアーディーから船に乗り、ナイル川を遡って多くの場所に立ち寄ったとされ、特にエジプト中部のアシュート市近郊にあるクスカーム山には六ヶ月以上滞在したと伝えられている。五世紀初めのアレクサンドリア総主教テオフィルスに帰される伝説によると、ある日テオフィルスは聖母を幻視し、その中で、

このクスカーム山の聖処女教会の祭壇は、聖家族の滞在中に幼子イエスが自ら聖別したものであると告げられた。そのためこの教会はエジプトで、そしておそらく世界でも最初の教会とされており、それによりクスカーム山は「第二のエルサレム」とも呼ばれる。このクスカーム山に建てられたアルムハツラク修道院は、砂漠の隠修士たちを集めて共住制修道院を創始した聖パコミウス（二九〇―三四六年）が建てた修道院のうちの一つであるとも言われているが、実際にこの修道院に関する記録が史料に現れ始めるのは十三世紀頃からで、それ以前の詳細は不明である（Coquin and Martin 1991）。クスカーム山のアルムハツラク修道院は、「第二のエルサレム」としてエチオピア人の巡礼者を多く惹きつけており、十四〜十五世紀頃には数十名のエチオピア人修道士たちがこの修道院に居留していたとされる。

このように、聖家族の足跡には、多くの場合聖母マリアに捧げられた教会や修道院が建てられており、コプト正教会におけるマリア崇敬は非常に盛んである。コプト正教会の伝統において特徴的とされるのは、マリアの逝去（*martha*、魂の昇天）と被昇天（*g. e. e.*、身体の昇天）が別個の出来事とされていることだろう。これは、四〜六世紀頃のキリスト教世界でマリアの逝去／就寝／被昇天に関する神学的議論が進展していく中、複数の発展段階に属する要素がアレクサンドリアの伝統に取り入れられたことによるものであろうと推測されている（Eshrock 2001）。聖母マリアに関連する祭日には以下の表のようなものが挙げられる。

この中で特に重要視されているのは八月の被昇天祭で、使徒



写真3：1968年の聖母マリアの顕現。
Mawqi' al-Anbā Takla Hīmānūt "Image" より。

また、表に示されているように、四月二日はカイロのザイトゥーン地区にある聖処女教会のドームの上に聖母マリアが顕現した記念日となっている。この顕現は一九六八年、すなわちエジプト率いるアラブ軍が六七年戦争で宿敵イスラエルに大敗を喫した翌年の出来事であり、敗戦によって傷ついた人々の心を慰撫するものであったとされている。

たちの断食に倣って被昇天祭の前の十五日間に相当する八月七日から二十一日まで断食が行われる。聖家族が訪れた最南端の地とされるドウルンカ修道院では、この八月の被昇天の断食の時期に聖処女マリアのマウリド（原義は誕生祭。死亡日を死後の世界における誕生の日とみなす）が盛大に祝われ、エジプト各地から多数の巡礼者が訪れる。なお、クスカーム山のアルムハツラク修道院では六月十八日から二十七日、聖家族が立ち寄ったとされるサマルートの聖処女修道院では復活祭の三十日後から主の昇天までの十日間など、同じ聖処女マリアに捧げられた教会や修道院であっても、それぞれマウリドが行われる時期は異なる。これらの聖処女マリアのマウリドには、ムスリムも多数参加するのであるが、それはイスラームにおいても「預言者イエス」の母マリアが崇敬の対象となっているからである。

祭りの名	グレゴリオ暦	コプト暦	補足
マリアの逝去	1月29日	トゥーバ月21日	コプト暦で毎月21日は月命日でマリアの記念日
マリアの被昇天(1)	2月1日	トゥーバ月24日	死の3日後に身体が天使たちによって天に上げられたとされる記念日
マリアの顕現	4月2日	バラムハート月24日	1968年4月2日にカイロのザイトゥーン地区に顕現したことを記念
受胎告知	4月7日	バラムハート月29日	降誕祭の9ヶ月前
マリアの誕生	5月9日	バジャンス月1日	
聖家族のエジプト到来	6月1日	バジャンス月24日	
マリアの奇跡	6月28日	バウーナ月21日	使徒マティアスがつながれていた鉄の足かせと鎖を祈りによって溶かした奇跡
マリアに捧げられた最初の教会献堂 ヨアキムへのマリア誕生告知	8月13日	ミスラー月7日	現在のギリシアのフィリピにある教会を指す コプト正教会は無原罪の御宿りという教義を認めていない
マリアの被昇天(2)	8月22日	ミスラー月16日	マリアの身体が天に上げられるのを見たのは雲に乗ってインドから移動してきた使徒トマスのみであったため、ほかの使徒たちも最後に一度会いたいと願い、断食の後その祈りが聞き入れられた記念日
クスカーム山の聖処女教会献堂	11月15日	ハトゥール月6日	
マリアの神殿奉獻	12月12日	キヤフク月3日	

【表：コプト正教会における聖母マリアに関する祭日】 Gregorios (1991) を基に筆者作成。

このマリアの顕現は一九七一年まで断続的に続き、その間キリスト教徒のみならず一般のムスリムも、またナセル大統領までも含む多くの人々が、光に包まれたマリアの姿を目撃したと言われている（写真3参照）。この顕現は当時のコプト正教会総主教キルス六世によつて公認され、世界的にも注目を浴びた。ちなみにこのザイトゥーン地区も聖家族が立ち寄った地とされており、上述のマリアの木から三キロメートルも離れていない。

このように、聖家族のエジプト逃避行に関する伝承は、井戸、洞窟、木、教会、修道院など、目に見え、触れて感じられるものとして示され、あるいは祭りや記念日などの形で記憶されており、何世紀もの時を超えて身近に感じられる出来事となっている。また、エジプトという土地およびエジプトの教会が神の祝福を受けている証としてコプト正教会で重視されていることから、聖家族のエジプト逃避行はエジプトの歴史教科書でも取り上げられている。近年では、エジプト考古省が観光促進のため聖家族の足跡を世界遺産に登録しようと試みており、聖家族の足跡のカタログを出版して広報活動に力を入れている。また、特に二〇一七年四月のローマ教皇フランシスコによるエジプト訪問の後、エジプトの観光大臣がローマ教皇庁に聖家族の足跡を巡礼路として公認するよう働きかけ、翌年公認されるなど、聖家族の足跡は存在感を増す一方だ。

ところで聖母マリアは、ザイトゥーン地区に顕現して以来、聖家族が立ち寄ったという伝承がある場所に限らず、たびたびエジプト各地に出現している。例えば一九八六年のカイロ市シヨブラ地区、一九九〇年のボール・サイード市、一九九七年

のシンティナー・アルハジャル村（デルタ地方のミネーフィーヤ県）、および二〇〇〇年のアシュート市などである（Bell 2013: 202）。筆者がエジプト滞在中だった二〇〇九年十二月にも、カイロのワッラーク地区の教会に聖母が現れたと報じられた。そのため、筆者は寒い冬の夜中にその教会に赴き、多くの信者が聖母マリアに捧げるマディーフを歌い続ける中、とりあえず待つてみたが、結局聖母は現れずじまいであった。内心、聖母というのは、六八年の例に見られるように、敗戦あるいはそれに匹敵するような何か重大な出来事が起きた／起きる時に何らかの重要なメッセージを伴って現れるものではないのかと疑問を抱いていた。筆者の目には、そしておそらく多くのエジプト人の目にも、世の中はまったく平和で普段通り安定しているように見えていたのだ。しかしこの一年後にはチュニジアでブー・アズイーズィー青年が抗議の焼身自殺を行い、それに端を発する一連の「革命」がチュニジアおよび周辺諸国で起き、エジプトでもムバラク政権が倒れた。筆者もカイロの地下鉄で催涙ガスに悶絶した。その場に暮らしていても見えない、感じられないが、じわじわと迫り来る変化を聖母の顕現は示していたのかもしれない。

【参考文献】

- Atiya, Aziz Suryal. 1991. "Flight into Egypt" in Aziz Suryal Atiya ed., *The Coptic Encyclopedia*, vol. 4. NY: Macmillan.
- Bell, Meriam N. 2013. *An Incurable Past: Nasser's Egypt Then and Now*. Gains-

ville: University Press of Florida.

Coquin, René-Georges and Maurice Martin. 1991. "Dayr Al-Muharrag" in Aziz Suryal Atiya ed., *The Coptic Encyclopedia*. vol. 2. NY: Macmillan.

Esbroeck, Michel Van. 1991. "Assumption." in Aziz Suryal Atiya ed., *The Coptic Encyclopedia*. vol. 1. NY: Macmillan.

Filth al-Anbā Bishoy. 1999. *Nabdhā Mukhtasara 'an al-'Ā'īla al-Muqaddasa min*

Bayr Lahm 'ilā Misr wa al-'Āwḏa. Cairo: Dar Nūbār lil-Tibā'a.

Gregorios, Bishop. 1991. "Theotokos, Feasts of the." in Aziz Suryal Atiya ed., *The*

Coptic Encyclopedia. vol. 7. NY: Macmillan.

Meinardus, Otto F. A. 1963. *In the Steps of the Holy Family from Bethlehem to Uppur Egypt*. Cairo: Dar al-Maaref.

木ハハトノハ綱菜

Mawqī' al-Anbā Takla Hīmānūt. "Holy Bible Maps: Map of the Trip of the Holy

Family in Egypt." Last accessed: 13 January 2020. (URL) <https://st-takla.org/Coptic-Bible-Maps/Engeel-2-New-Testament/Bible-Map-026-The-Holy-Family-in-Egypt-El-3a2ela-El-Mokadasa.html>

Family in Egypt." Last accessed: 15 January 2020. (URL) <https://st-takla.org/Gallery/Saint-Mary/13-Apparitions-of-Our-Lady-St-Mary/Saint-Mary-Apparitions-1-Zaitoun-06.html>

Mawqī' al-Anbā Takla Hīmānūt. "Image: Saint Mary Apparitions 1 Zaitoun 06."

Last accessed: 15 January 2020. (URL) <https://st-takla.org/Gallery/Saint-Mary/13-Apparitions-of-Our-Lady-St-Mary/Saint-Mary-Apparitions-1-Zaitoun-06.html>

toun-06.html